

2021年6月22日

コロナ禍における学童クラブ施設長のつぶやき

中村真理子施設長

A学童クラブは2020年4月、まさに新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言発出とほぼ同時に開設しました。「75名の子どもたちの名前をどうやって覚えよう」「保護者との関係作りは大丈夫かしら」など、職員全員が新規事業への不安がありつつも期待を膨らませてスタートするはずだったのに・・・待ち受けていたのは小学生を感染から守るという難題。

緊急事態宣言が発出されるよ！

開設当初、1日に50人登所してきたときには、学童クラブの移転、新設に対する利用者の期待の大きさを感じるのと同時に、正直、「こんなにたくさん来るんだ？」という気持ちになったことを覚えています。

朝、子どもが登所してくると動悸がしてきました。私は子どもが好きなのではなかったの？モヤモヤした気持ちになってしまう自分。これもみんなコロナのせい？・・・こんな風に感じる自分って失格だ！

コロナ禍で「なんで学童ばかりこんな大変な思いをしなければならないの？」という思いがなかなか消えませんでした。

それでも毎日通ってくる子どもたちの笑顔を見ていると、ある時ふっと「この子たち、学校が休校で他の子たちはみんなおうちの人と過ごしているのに文句も言わず、それどころか学童クラブでの生活を楽しんでいる！こんなに笑顔で過ごせるなんてステキだな」と思えたのです。

そして「世の中の人達が感染防止の観点から自粛をしている中でも働かなければならない人達を支えている仕事」と思い直し、コロナだからできないと考えるのではなく、どうやったらできるかを考えようと気持ちを切り替えることができたのです。

子どもたちから教えられました。子どもたちから力を貰った気がしました。たくさんの子たちが休んでいるのにがんばって学童クラブに来ている子どもたち。その子たちに精一杯楽しい時間を過ごして欲しいと考え、行事を再開することにしました。

まずは誕生会から始めてみました。保護者から「こんな時に誕生会をしていただきありがとうございます。子どもがとても楽しかったと言っていました」と連絡帳にコメントをいただき「よかった！これからもできることを探していこう」と思ったものです。

3年生遠足は『現地集合、現地解散』－これで良いじゃん！

小学校では公共交通機関を使用しての遠足は原則禁止とのことだったので、学童クラブでもそれに準じて3年生遠足は多摩動物園へ現地集合、現地解散で行いました。

苦肉の策として行ったことでしたが、施設長としての負担は軽減します。遠足を終えた後、「コロナが終息してもこれから遠足はこれでいいんじゃない？」と私。職員の賛同を得たものの、遠足ってなんのために行くんだっけ？人間は楽な方楽な方へと向かいがちです。楽なことを覚えちゃったら元に戻れるのかなあと少し心配になります。

手作りおやつ挑戦

手作りおやつは大変です。専門の調理員がいるわけでもないので材料の買い出し、注文から調理まで支援員が行います。コロナを理由に手作りを止め、お菓子など市販品で回していく日々でした。アレルギー児もいるので手が掛かることはやめましょうという職員間の了解もあり、私は「これでよし」と思っていました。

ところが、5月になって職員から手作りをやりたいという声が上がリ、どこまでできるかやってみようということになりました。

お菓子ばかりで子どもたちから不満が出ていたわけでもありません。それでも子どもたちに少しでも豊かなおやつを提供したいという職員の前向きな気持ちに私は嬉しくなりました。

難しかったマスク着用指導

去年の4月当初。子どもたちにマスクの着用を求めても、なかなかしてもらえませんでした。そのまま休校になり2か月半。子どもの人数は減り20人から30人位になったもののマスクをしている子は半分といったところだったのでしょうか。

ところが、小学校が始まってみると、どの子もちゃんとマスクを付けてきました。学童クラブの支援員が言っても聞かないけれど学校の先生が言うと言くと聞くということはこれまでも経験済みです。強制力のないところが学童クラブの良いところではありますが、マスクの着用は命に関わることなのでもっと強く言わなければいけなかったのかなと振り返っています。

結果的には今の変異株とは違い、子どもは感染しにくいということだったので良かったのですが、命の問題ではもっと厳しくしなければいけなかったのでしょうか・・・。

まだできることがありはしなかったか・・・

自粛期間中でも学童クラブに来ていた子には制限のある中でもいろいろな取り組みをしてあげることができましたが、自粛していただいた家庭には何もしてあげられなかったという思いがあります。またまたコロナだから仕方ないと言ってしまいそうになりますが、退所してしまった子どもたちも多く、ほんとはもっとできることがあったのではないかと、全力を尽くせなかった気がして悔やまれます。